“わかし”の有効利用

“わかし”とは、ブリの銘柄のひとつで、本県では体重 500g 未満（尾叉長 35cm 前後まで）のブリが“わかし”と呼ばれています。わかしは主に夏～秋に伊豆東岸定置網にまとまって入網する傾向があり（図 1、2）、500g に近い個体であれば、単価は 100～200 円/kg ですが、一度に大量に入網した時や、小型個体（体重 150g 前後、尾叉長 20cm 前後）は二束三文（1kg 当たり数円）で取引されてしまいます。伊豆東岸定置網では、大量に入網した小型個体は水揚げせずに海へ逃がすなどの対応を取ることが多いのですが、熱海市の地先で大型定置網を経営する網代漁業株式会社（以下、網代漁業）では、わかしの有効利用に取り組んでいます。

その一つが、わかしの蓄養です。網代漁業は定置網に入網したわかしを海面生簀に収容して、定置網に入網した小型のいわし類等を餌として与え、1kg 以上になるまで成長させて出荷しています（図 3）。また、蓄養は魚体を大きくすることだけでなく、年末年始など単価相場が高くなる時期に合わせて出荷することも可能となるため、これらの取り組みにより単価は 1kg 当たり 1,000 円前後まで向上し、収益向上に繋がっています。

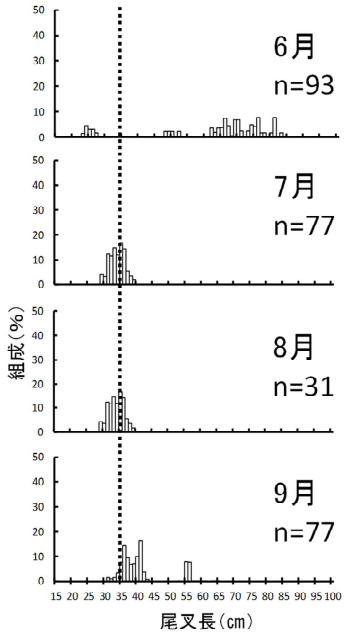

図 1　伊豆東岸定置網における 2021 年 6～9 月のブリ体長組成
※点線（35cm）より小さい個体が“わかし”

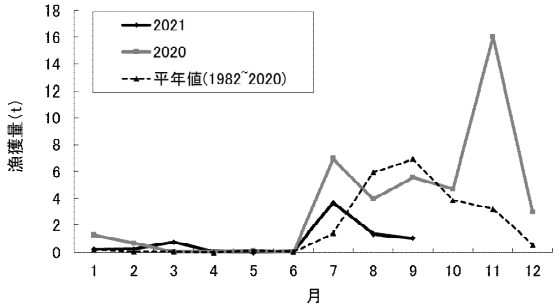

図 2　伊豆東岸大型定置網におけるわかしの月別漁獲量

また、今年は活魚で水揚げしたわかしの養殖用種苗としての販売にも取り組んでいます。ブリ養殖は主に鹿児島県や大分県、愛媛県など西日本を中心に行われていますが、ブリ養殖業者は「もじゃこ」と呼ばれるブリの稚魚をもじゃこ採捕業者から購入して養殖を行っています。もじゃこは「流れ藻」と呼ばれる海上を漂うモク類などの大型海藻を住処にしており、もじゃこ採捕業者は、この流れ藻を掬うことでもじゃこを採捕するのですが、今年は流れ藻の量が少なかったり、もじゃこの発生時期が例年よりも早かったりといったことが要因で、もじゃこ採捕量が非常に少なく、養殖業者はもじゃこの確保に苦慮していました。一方、日本各地の定置網には、わかしは例年通り入網していたため、養殖業者から定置網に養殖用種苗としてのわかし提供依頼があり、網代漁業はこの依頼を受けて、6 月頃からわかしを養殖業者に提供しています。養殖用種苗としてのわかし（平均約 300g）の単価は、1 尾当たり約 200 円とのことであり、これは鮮魚での取引単価の約十数倍の価格（鮮魚取引時の単価が 50 円/kg と仮定すると 15 円/尾）でした。

図 3　水揚げされた蓄養わかし

蓄養には飼育担当者が必要であり、養殖用種苗販売は活魚で水揚げする手間が掛かりますが、近年、伊豆東岸定置網の漁獲量は減少傾向で推移しており、定置漁業経営の安定化や限られた資源の有効活用の観点から、こうした取り組みは非常に重要と考えます。

（鈴木勇己）